

【講座名】	講座Ⅲ「それぞれの学びの場での教科指導における実践報告」④
【指導助言者】	県立日南くろしお支援学校 主幹教諭 後藤 哲也 串間市立市木小学校 教頭 荻原 健弘
<p>1 指導助言者より（各実践報告を受けて）</p> <p>(1) 日南くろしお支援学校 主幹教諭 後藤 哲也 先生より</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 鈴木先生の実践報告に対して <ul style="list-style-type: none"> ・知的障がい教育では、何を教えるかを選択することが難しい。生徒の課題をよく分析し、その子に必要なことをしっかり捉えた実践、研究であった。4名の学級であったが、子どもに応じた課題の設定、学習の組み立て、教材の選定がなされており、意欲的に学習できていた。学習内容も本人の課題に即しており、生活改善に役立っていてよかった。常に生きる力を身につけることを念頭に置くことが大切である。 ○ 若松先生の実践報告に対して <ul style="list-style-type: none"> ・それぞれの子どもの実態に応じた指導であった。ICTや支援学校の教材の活用がよくなされていた。子どもたちができた！と達成感を味わうことができる授業実践であった。支援学級と通常学級の壁を取り除くことができた実践であった。 ○ 水谷先生の実践報告に対して <ul style="list-style-type: none"> ・グローバルな話を聞くことができ大変参考になった。国語科における実生活につながる。 <p>(2) 串間市立市木小学校 教頭 荻原 健弘 先生より</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 鈴木先生の実践報告に対して <ul style="list-style-type: none"> ・生徒の課題分析が十分になされている実践であった。社会参加を目指した内容、家庭での生活を見通して行えるものであった。試行錯誤の教材作りの大切さを改めて感じた。来場の先生方もできることと分かることは違うということを考えながら授業を行ってほしい。 ○ 若松先生の実践報告に対して <ul style="list-style-type: none"> ・校内支援体制の充実が図られていた実践研究であった。校内サポートの時間割づくりや開かれた学級づくりなどの工夫が見られた。校内の職員や関係機関との連携もすばらしかった。楽しい教材の開発を行うことにより、通常学級の児童も抵抗なく支援学級に足を運ぶことが増えたのではないか。 ○ 水谷先生の実践報告に対して <ul style="list-style-type: none"> ・表現力というのは、通常学級でも課題となっている。アクティブラーニングの実践が行われていた研究であった。海外の教育事情も大変勉強になった。オランダの教育は参考になることが多かった。学級でも一対一の個別指導になりがちだが、一斉でやりとりができる活動もあるといいと感じた。 <p>2 質疑応答（各発表者、各指導助言者に向けて）</p> <p>Q1（きりしま支援学校松田先生より）</p> <p>若松 T のビジョントレーニングはどんなアプリか。また、どうしてこのトレーニングを取り入れたのか。</p>	

A1 音読での読み飛ばし、グラフの軸の読み取れなさから、必要と感じ取り組んだ。アプリは、動く数字や物を順番に押していくものなどで、レベルに応じたものができるようになっている。

Q2 (るびなす支援学校隈田原先生より)

鈴木 T の実践で、個別の支援計画の活用から本人や保護者の願いを踏まえて、どのように合意形成に至ったのか。

A2 個別の支援計画を見て、まず課題となることを見つけた。それからプリント等で実態把握を行い、本人と話をしながら生活に結びついた内容を設定した。

Q3 (みやざき中央支援学校高木先生より)

水谷 T の報告で出た「ドラマ」の授業において、負の感情を表現するとあったが、怒って物などに当たったりしないのか。

A3 言葉や表情に怒りの感情を出してもよい(叫んだりしてもよい)と教えられているようで、物に当たったりはしない。

講座の様子

